



ピッポ新聞

2006
8
No.212

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

この夏休み
お父さんに贈る絵本!

「絵本?子どもが読むもんじゃないか」なんて考えているお父さん、それがちがうんですよ! なかなかどうして、絵本だつてこれ捨てたものじゃありません。そこで提案です!この夏、絵本の世界を楽しんでみませんか。一人でこつそりと、でもいいし、子どもと一緒にだつていい、とにかく手にとつて絵本を読んでみませんか。「どんな絵本を?」それは、どんな絵本でも良いのですが、まずは「とりあえずビール」でなくて、とりあえずの絵本をピッポのおじさんが紹介します。この辺りから読み始めてください。それから後はご自身の好みで探し出してください。絵本の世界は意外と広がりがありますよ。おじさんは子どものためにでなく、自分の楽しみのために絵本を読むお父さんが一人でも多くなることを期待します。



まずは遠い昔の子どもの心を甦らせてくれるこの絵本からどうぞ。

『まがればまがりがみち』

(井上洋介・作 840円 福音館書店)
遠い子どもの頃、あなたはこんな気持ちを抱いたことはありませんか。日暮れの道を家路にむかって急いでいると、前方の薄暗い曲がり角から何か変な気配がする「どうしよ?あれはなんだ?」何て不安が心をよぎる。すると・・・。
この絵本を読むと、子どもの頃抱いた夕暮れの不安感とともに、なにかしら甘酸っぱい郷愁が甦ってきます。もつとも、昔の人は逢魔が時と言つて恐れた時間帯も、今や町からは暗がり消え、隅々まで明るく照らし出されている。町中では監視カメラさえ据えられている。これでは魔物も出るに出不れず、さぞや困つて居ることだろう。

昔、野球少年だったお父さんに!

『ホームランを打つたことのない君に』(長谷川集平・作 1260円 理論社)

今や少年スポーツと言えば、サッカー全盛の感があります。お父さん、少年時代に、ちよつとした空き地でキャッチボールや三角ベースボールを経験しませんでしたか?(ひよつとして時代が違つて居るかな?)1955年生まれの子、この絵本の作者長谷川集平も野球をたつぷりして子ども時代をすごした一人だ。野球をやつていれば誰だつて一度は夢見るのがホームランである。王や長島が何故未だに人気があるのか!それはここぞとファンが期待した場面ホームランを打ち続けたからである。その印象が消えないからこそ、彼らの人気はお父さんたちによつ

て維持されているのではないだろうか。

この絵本の少年野球の主人公ルイも6回表2点ビハインド、1アウト、ランナー1・3塁という場面で打席に立ったのである。



そこで夢見たのは一発逆転のホームランであつた。しかし、結果はボテボテのセカンドゴロでダブル

プレイになってしまふ。この絵本はその場面からはじまるのである……。サッカーではなく野球をやってきたお父さんは、きつとこの絵本で感じるものがあるだろう。本書では今やメジャーリーガーの城島らしきホームランバッターが象島と言つ名で登場する。ホームランバッターの彼も、一日にしてなつたのではないことが語られている。

この絵本、見返しが野球双六になつていて、別の楽しみも提供してくれるのである。

長谷川集平の『はせがわくんきらいや』『とんぼとりの日々』（いずれも復刊でブックキングから）もおとうさんにお薦めだ。

自然のなかでテントを張りのんびりと1週間、そう！せめて気分だけでもね。

『星空キャンプ』（村上康成・作 1890円 講談社）

湖のほとりで家族がテントを張り、のんびり一週間で過ごす。その一週間の間に家族はだんだん自然の中にとけ込んでいく様子が描かれている。読んでいるこちらも、その一端を感じることができて、なんだか気分がとても気持ちよくなる絵本である。その一週間のある日、お父さんはとうとう45cmのマスを湖で釣りあげた。お父さんは得意になって回りを見回すと（これ、釣りの



人は必ずやる動作なんです。人が回りにいようがいまいが、自分が大きのを釣った時に何故かしら周囲を見回すんですよ。）、すぐ後では、赤い帽子のおじさんが、なんと85cmのマスを釣っているではありませんか。おとうさんは「ギャホン」と言つたところですよ。

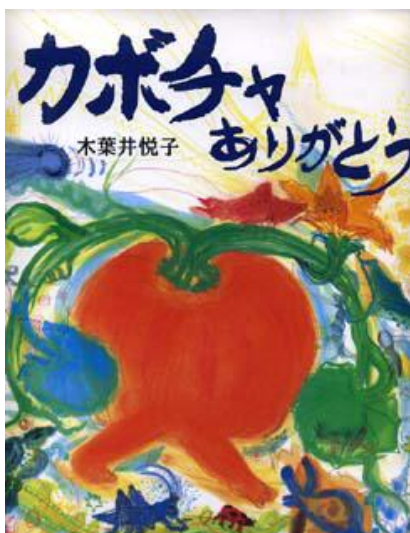
でもね、村上さん！（これ、おじさんが作者に文句を言っているのです）、この赤い帽子のおじさんが釣った85センチのマスを何気なくリリースしている姿を描いていますが、ここはちよつと格好がよすぎませんか。釣り人は必ずしとめた獲物は持ち帰る

て食すものだ。ぼくは何時だつてそうしてきたけど。だれがリリースなんてするものですか……。

他の生を喰らつて生きていることを、我々は忘れてしまつていませんか！

『かぼちゃありがとう』（木葉井悦子・作 1890円 架空社）

この絵本は表紙のすぐ裏側の見返しから読み進めてほしいな。そこはモノクロで描かれたカボチャ畑である。物語はここから始まる。カボチャは乞われるままに、自分の体や、ツルや葉っぱに次々に小さな生き物たちを止まらせる。生き物たちに熟れた自分（カボチャ）を食べさせるためにである。



カボチャは様々な生き物たちに食べられて、最後に残つたのは堅い種だけである。種は折からの雨に打たれて土の中にこねられて埋り、眠りにつくのである。そして再

びウラ見返しにページは移ると、そこには土の中から芽を出したカボチャが・・・。食物連鎖を力強く描いた絵本。

実はこの絵本現在版元で品切れ中です。ぼくはとても好きな絵本の一冊ですから、重版して欲しいと思っています。でも、ピツポ古書クラブに在庫が2冊あります。一冊はカバーなしの初版で、販売価格は1890円です。もう一冊は2003年の3刷りで販売価格は2100円です。こちらはカバーが有り状態も良いです。

自分の今立っている場所を知ることが、とても大切なことではないでしょうか！

『せいめいのれきし』(バージニア・リー・バートン・作 いしいももこ・訳 1680円 岩波書店)



るところから始まります。天文学者、地質学者、古生物学者、歴

この絵本は5幕の芝居仕立になつています。副題が「地球上にせいめいがうまれたときからいままでのおはなし」となつていて、物語は太陽や地球が誕生す

史学者そしておばあさんと作者バートンが登場します。それは長い長い話です。話が進む内にこの地球に生き物が登場するのが、やっとカンブリア期という5億5千万年前のことです。

そして、わたしたち人間は登場するのはそれからずーと後のことです。ですからナレーターとして歴史学者が登場するのはお終いの方なのです。いわばこの地球では新参者なのです。ところが、今や人間は地球の支配者としてあらゆる生きとしいけるものの上に君臨して、彼らの殺生与奪の権を握ったかのようにおごっています。

ぼくは、この絵本を読むたびに、今いる自分は、突然一人で降つて湧いた存在ではなくて、長い長い歴史の結果として自分が居るのであることをつくづく思うのです。

ですから、自分という存在を大切に思い、地球上の生きとし生けるものたちを大切に思い、ともに同時代を生きている喜びを常に感じていたいものだと思つのです。バートンのこの「生命の歴史」はそんな事をかんじさせてくれる絵本なのです。作者バートンはこう結びます。

さあこれで、わたしのおはなしは、おわります。こんどはあなたがはなすばんです。あなたの窓の外をごらんください。さあ、このあとは、あなたがたのおはなしです。その主人公は、あなたがたです。ぶたいのようには、できませんでした。時は、いま。場所は、あなたのいるところ

る。いますぎていく一秒一秒が、はてしない時のくさりの、新しいわです。生きものの演ずる劇は、たえることなくつきーいつも新しく、いつもうつりかわつて、わたしたちをおどろかせます。

こうして続いてきた歴史を、子どもたちを通して未来につなげて終わるのです。

どうです。たった5冊を紹介しただけですが、絵本のおもしろさを少しでも感じていただけたでしょうか？

面白い絵本は、まだまだいっぱいあります。お父さん！是非絵本の読者になつて、子どもと一緒に楽しんでください。

ねえー、この本読んだ

『スタジイのなつ』(谷口國博・文 村上康成・絵 1260円 ひさかたチャイルド)



夏、一本のおおきなスタジイの木のまわりには、朝、昼、夜、様々な音が、様々な生きものたちが集う。村上さんの独特の絵によって、生きもの賛歌

はスタジイの目を通して伝わってくる。貴方の身近にもこんな大きな木はありますか？

『さがしてみよう 虫は忍者』 (海野和男・作 1365円 新日本出版)
夏休み虫捕りに出かける子もいるでしょう。ただ虫だつて簡単に見つけれられて捕られたり、天敵みつかったら困るよね、そこで様々な工夫(?)しているんだな。これを擬態と呼ぶんだつて。



て。この本を書いた昆虫写真家の海野さんは世界中の昆虫を求めて出、そんな虫たちの様子を写真に撮つて本にしたのがこれだ。他に『虫の親子』『虫の変化』(いずれも1365円 新日本出版)も出ているよ。

『かつぱのかつぺいとおおきなきゅうり』 (田中友佳子・作 1470円 徳間書店)
子どもの河童かつぺいは、日照り続きですうしてもキュウリが食べた



く探しに出かけます。道の先に緑色の物をみつけて飛びつきますがキュウリではありません。とつとつ間違えて飛びついたら恐竜にはね飛ばされて引っかかたつるを

たどると、それは雲の上のキュウリ畑でした。それにもキュウリと河童は何故対になつてゐるのかな?

『リベックじいさんのなしの木』 (テオドール・フォンターネ・文 ナニー・ホグロギアン・絵 藤本朝巳・訳 1575円 岩波書店)
この絵本、伝承のバラッドを下敷きにファンターネの詩にホグロギアンが主人公の人柄がにじみ出るような版画で表した。自然な実りはみんなで分かち合つて味わうという人間本来の心が伝わってくる。



おじいさんの表情などは見ているだけで心と感動します。

『ワイズ・ブラウンの 詩の絵本』 (マーガレット・ワイズ・ブラウン・詩 レナード・ワイスガード・絵 木坂涼・訳 1680円 フレーベル館)
なつのうた

- さいしよは うさぎ ぴよっこり 4がつ
- つとびでて 5がつ
- おつぎは こまどり 6がつ とんで 7がつへ

ほたるは あかりで おぼえる かかり 8がつのおわり 9がつのはじまり
さいごは けむし なつから ゆっくりはいだして ゆっくり ねむりの まんなかへ



ている。

ワイズ・ブラウンの詩は立ち止まって、静かに耳を傾け、観察すると、自然が語りかけてくる音や動きを表している。

インフォメーション

* セブリ舎ネイチャースクール
「山の暮らし」
「差し掛け小屋で野宿する!」

1、7月25日〜27日 2、8月11日〜13日
対象は小学4年以上の親子(各回8名)
参加費 大人25000円子ども10000円
「森の人形工房」(自然の素材で操りにんぎょうを創ります) 8月5日〜6日参加費 大人13000円子ども7000円 詳細と申し込みは0556(22)6479 チラシはピッポにもあります。